

8月15日がくるたびにめぐる思い

公文國浩の戦争

(台南航空隊整備上等兵曹)

戦後62年目となり、私たちの多くが、戦争を知らない世代となっています。「戦争は遠い昔のこと」かも知れませんが、今なお世界各地では戦争やテロが続いています。8月15日の「終戦の日」は、「戦争」に目を向け、平和の尊さについて考えてみませんか。

ラバウル(現・パプアニューギニア領)に派兵され、幾度の危機を乗り越えて生還した公文國浩さん(香北町白石・85歳)の戦争体験をご紹介します。

(おいたち)

私は、大正十二年十一月、在所村白石に生まれた。青年学校に通う頃は、日中戦争の最盛期で、海軍軍楽隊

にあこがれて佐世保海兵団の四等水兵を拝命したのは、昭和十五年六月のことであった。

軽巡洋艦「川内」

に乗り組み、南支支援作戦に参加した。昭和十六年九月、第六十八期普通科整備術練習生として追浜空で教育



入隊時の公文國浩さん(当時16歳)

を受けた。卒業すると、台南航空隊付を命じられラバウルに展開する本隊に追及した。

(ニューギニアの戦い)

昭和十七年七月、南海支隊が来ており、同村の小松

竹喜君と面会し、武運を祈

ったが、その親友はニューギニア島に倒れてしまった。

八月、ニューギニア島ブナ飛行場で南海支隊支援に挺身した。整備員三十人で

零戦六十機を担当したが、その忙しさは多忙以上のもので、夕方から翌朝までが

我々の戦闘であった。その使命は「一機でも多く飛ばせること」で、夜間空襲、

現地人の襲撃もあった中で、燃料や機銃弾の補充、被弾機の補修、エンジンの調整、

機器の点検：と若いからやれたと思う。この頃の戦況は優勢で、搭乗員が撃墜の

話をしてくれたのは、自分が落としたような気分にもなり、血が沸いたものであった。

そんなとき、八月二十六日朝、出撃前に敵襲を受けた。敵機十五機はエンジン

を止め、音を消して降下する奇襲をかけ、その応戦のため緊急発進した零戦三機

は、脚きゃくを入れる間もなく火の玉となってヤシ林の向こうに墜落した。前途有為の若者三人が戦死した瞬間であった。

ここは悪疫の地で、私はやがて熱帯熱に罹患し、体力を消耗して危篤となったらしい。戦友が墓穴を準備したと後で聞いた。幸運にも福島軍医の計らいで空輸され、ラバウル海軍病院で療養することができた。

(ネグロス島の戦い)

一度帰国したが、昭和十八年五月、本隊は二五一空として再編され、ラバウルに再進出した。この頃は、

ガダルカナル島方面で激戦を展開しており、「ラバウル海軍航空隊」と歌にもなった部隊で、多くの撃墜王

と呼ばれる搭乗員を輩出した。各地の飛行場に勤務し、

十二月、二〇四空へ転属しサイパン島に行った時は、

二等整備兵曹となっていた。昭和十九年三月、パラオ大空襲はペリリュー島飛行場であった。二日間で延べ千

五百機が波状攻撃に來たよ

物は灰になってしまった。

昭和十九年四月、比島(フリピン)セブ飛行場に移って、パナイ島に派遣されている間に帰隊は困難な戦況となり、ネグロス島ピナルパガン飛行場に勤務することになった。この島は、ルソン島からレイテ島攻撃の前進基地で、攻撃隊が発進すれば敵大型機が爆撃し、艦載機が空襲に來た。

比島の戦況が思わしくなくなると、ゲリラ活動が活発化し、住民は離反して艦砲射撃も受けるようになった。十二月三十日、午前五

時三十分頃、在比ゲリラの襲撃があり、壕からはい出る時、後頭部から背中に抜ける貫通銃創を受けた。焼

火箸が通過したという気がし、意識不明が三時間半に及んだ。幕舎で渡辺軍医の

手術を受け、五、六人の輸血を受けたらしい。出血が

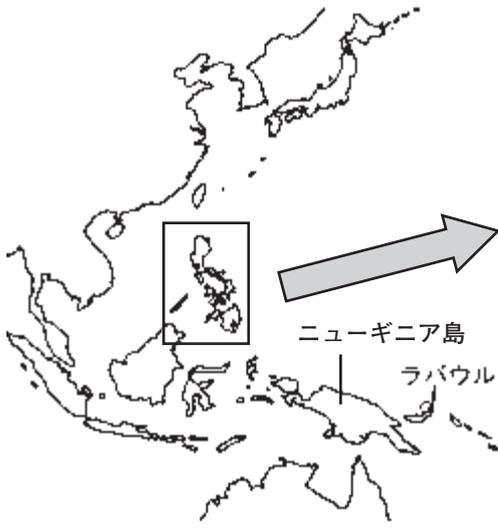
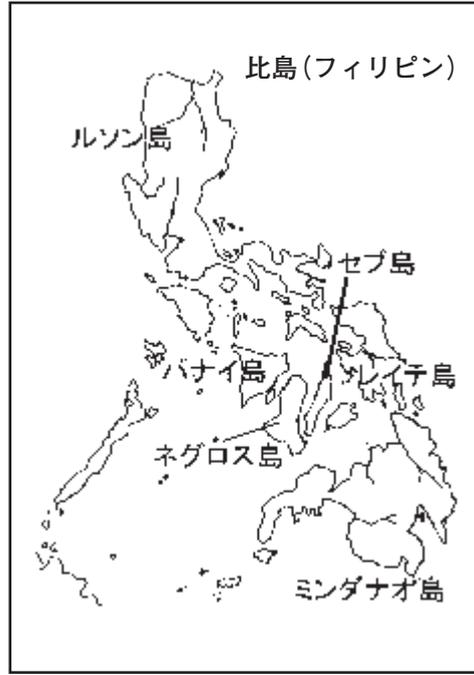
小バケツ一杯で、戦友は経験から、頭部の負傷は助

からないと知っていて、墓穴の準備をしたといった。それでも、武運が強いという

のだろうか、徐々に回復をした。

昭和二十年一月、戦況はさらに不利となり、山岳部に転進することになる。ゲリラと日本軍の住居が入れ替わったということであった。傷口は完治せずウミが出ていたが、中堅幹部ということもあって百二十人の

尖兵を勤めた。マンダラカ山脈は現地人が「魔の山」と呼んで恐れ、一度入山すると帰れないとも聞いていたが、他に行く場所はなかった。背負った食糧は数日しか持たず、大ジャングルだったが爆撃され、艦



砲射撃も受けた。直径三呎の大樹が切れて飛ぶそんな攻撃であった。畝部に陣地を占め、下山して食糧を求めると、迫撃砲や機関銃で撃たれた。鉄橋爆破の後方攪乱もやったが、どれほどの効果があったものか。...

圧倒的な戦力の差が見えていた。ある陣地で、須崎の谷岡水兵長が足を負傷して動けず、坂道を背負って登り、足を引いて坂道を降ろした。歩けない者は残置するが暗黙の了解で、情に流されれば共に骸となることは戦場の常識であったが、同県人でもあり捨て置くことはできなかつた。

（戦闘停止とその後）

昭和二十年九月十七日、ガクガク盆地であつたと思ふが、終戦を知り幹部協議で投降を決した。ネグロス島ファブリカから、レイテ島タクロバン収容所に送られた。即日、入院を命じられたが、白人や黒人の看護婦がいて、すぐに「白い液体」を注射された。ああ、これで殺される。流言に聞いた葉殺であるうと覚悟を

した。今から思えば笑い話であるが、日本軍では軍医が介錯として薬を注射するとも聞いていたので、一度は絞首台に登つたようなものである。その日から傷は飛躍的な回復を見せた。どうもペニシリン注射であつた。タクロバン飛行場は見渡す限りに戦争資材が野積みされ、これでは勝てないと思ひ知つた。

昭和二十年十二月、土佐山田駅に降りたが、在所へのバスは終わつており、歩いて午後十一時、なつかしのわが家の門を叩いた。音信不通の息子を迎えた母は、玄関に座り込んでしまった。

その後、私は数年間マラリアに悩み、いまだに雷は不得手である。激しかった空襲や艦砲射撃に体が反応するからである。

（戦いを終わって）

戦前の教育は、御国のために兵役に就くのは当然の義務とされており、海兵団入団には村をあげて征途を祝つてくれたが、復員者を迎える故国の浦賀（神奈川県）は、冷たい木枯らしが

吹いていた。戦争をした世代も数が減つた。この世代が国の前途を思い、身を挺して祖国を守ろうとした行為は長く讃えられるものと思うが、戦争をすれば一般国民は失うものばかりであつた。自己の利益に奔走し、殺伐とした世相の日本国を、戦後復興を支えた世代として、戦陣に銃後に倒れた二百五十万人は許してくれるだろうか。と、終戦の日がめぐるとたびに思う。

（若者へ）

私は、日本が軍備を持つのは反対である。憲法九条の改正も危惧される。日本人は軍備を拡張し、東洋に楽土を建設すると計画してアジアの国々に迷惑をかけた。軍隊で脅すような国交をすれば、反発する者も出る。日本が米国と戦争したことを知らない若者もいると聞く。

我々の声を聞いてほしい。これから日本を背負う世代が、二度と間違つた方向に舵をきることがないように祈るばかりである。